



遠隔授業による「日本語入門コース」授業の実践例

四宮, 愛子

(Citation)

神戸大学留学生教育研究, 7:21-37

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482094>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482094>



〔実践報告〕

遠隔授業による「日本語入門コース」授業の実践例

四宮 愛子

【キーワード】音楽・動画、グループワーク、協働学習、リアルタイム型遠隔授業、少人数学習

はじめに

新型コロナウイルスの世界的な規模での感染拡大により、神戸大学グローバル教育センター（GEC）⁽¹⁾は、原則、すべての日本語科目の授業を遠隔同時配信で実施する方針となった。それを受け、「日本語入門コース」ではZoom（オンライン会議システム）を用いて、リアルタイム型遠隔授業を実施した。GECではレベル別、技能別に様々なコースが開講されており、「日本語入門コース」はゼロ初級の学習者を対象としたコースである。

本来であれば、遠隔授業の実施は、授業内容や日本語レベルをはじめとする受講生のレディネス、ニーズに即してオンラインツールを使い分け、ICTを活用することが求められる。しかし、コロナ発生初期の日本は、教育現場や社会においてICTの活用がコロナと共存しながら社会活動を行うという考え方や方策が定着しつつある現在ほどには普及していなかったため、当初は大学組織としても教師一個人としても、手探りの状態から遠隔授業を開始した。

本稿は、パンデミック当初の混乱期から、コロナ禍中、コロナとの共存を図る社会活動期に至るまでの間、即ち2020年4月から2022年7月までの約2年半にわたる「日本語入門コース」の遠隔授業を振り返り、遠隔授業における工夫や留意点について報告する。

1. 「日本語入門コース」の概要

日本語入門コースの概要は、表1のとおりである。入門Ⅰ、入門Ⅱ、入門Ⅲの授業は、それぞれ表2の構成で実施した⁽²⁾。

表1 日本語入門コースの概要

対象	ゼロ初級（或いはゼロ初級相当）の学習者
受講生の属性	交換留学生：約80% 長期滞在の留学生（研究生・博士前期課程・博士後期課程）：約20%
学習動機 学習目的	日常会話の習得（あいさつや買い物など、サバイバルレベルの生活日本語） 研究室の学生とのコミュニケーション 日本文化（漫画、アニメ、JPOP、伝統芸能など）への興味関心
教科書	『みんなの日本語初級Ⅰ』本冊及び翻訳・文法解説
学習する課	第1課～第13課
到達目標	① ひらがな・カタカナ五十音の読み書きができるようになる（漢字学習は含まない） ② 日本語の初歩的な構造を理解できるようになる ③ 入門レベルの文型・語彙、日常会話の基本表現を用い、日常のことや自分自身のことについて簡単なコミュニケーションができるようになる
開講期間 ⁽³⁾	第1クォーター・第2クォーター（4月～8月） 第3クォーター・第4クォーター（10月～2月） ・コースの学習内容は「第1クォーター・第2クォーター」、「第3クォーター・第4クォーター」それぞれで完結（「第1クォーター、第3クォーター」、「第2クォーター、第4クォーター」は同内容を実施） ・授業実施回数：「第1クォーター、第3クォーター」は計8回、「第2クォーター、第4クォーター」は計7回
コースの構成	週1回（1回90分） 入門Ⅰ：聴解・文字 入門Ⅱ：文型（『みんなの日本語』練習A・B） 入門Ⅲ：会話（『みんなの日本語』会話・練習C） ・上記コースが1週間に3クラスあり、入門Ⅱ（文型）、Ⅲ（会話）、Ⅰ（聴解・文字）の順でそれぞれ別の曜日に実施 ⁽⁴⁾ ・入門Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3クラス受講を推奨（1クラス或いは2クラスのみ受講も可）

表2 入門Ⅰ・入門Ⅱ・入門Ⅲの授業構成

入門Ⅰ（聴解・文字）	<ul style="list-style-type: none"> ① アイスブレイク ② 語彙の確認 ③ その課の「問題」（『みんなの日本語初級Ⅰ』） 聴解問題と受講生が苦手意識を持つ練習が必要な箇所 ④ グループワーク その課に沿ったあるテーマについて、グループで日本語で話し、会話を作成する ⑤ 発表 ③で話したことや会話を発表する ⑥ デクテーション
入門Ⅱ（文型）	<ul style="list-style-type: none"> ① アイスブレイク ② 宿題・デクテーションのフィードバック ③ 語彙の導入 ④ 文型の導入（練習A）と練習（練習B） ⑤ 日本語の歌や日本文化に関する動画の鑑賞 ⑥ デクテーション
入門Ⅲ（会話）	<ul style="list-style-type: none"> ① アイスブレイク ② 宿題・デクテーションのフィードバック ③ 語彙・フレーズの確認 ④ 「会話」の動画 ⑤ 練習C ⑥ 日本語の歌や日本文化に関する動画の鑑賞 ⑦ デクテーション

2. 受講生の受講環境に配慮した対応

遠隔授業の実施形態は、表3のとおりである。

表3 遠隔授業の実施形態

実施形態	リアルタイム型
使用ツール	オンライン会議システムZoom 神戸大学学習支援システム（LMS）通称「BEEF」 ⁽⁵⁾ Googleドライブ
実施場所	自宅
受講者数	1～10名程度
受講環境	日本国内（寮、教室、研究室、外出先）、日本国外（自国の自宅）

その実施の際は、対面授業の場合とは異なる配慮や留意、即ち、対面授業を基準に考えると、下記に記載するような付加的な準備が更に必要であった。授業は、会議システムZoomを用いたリアルタイム型で実施した。教材の配布や宿題の提出はLMS「BEEF」を使用し、登録手続きの関係やインターネットの接続不良でBEEFにアクセスできない場合は、Zoomのファイル送信機能やGoogleドライブを利用した。また、インターネットの接続不良などにより授業のZoomリンクにアクセスできない場合は、メールで連絡してもらうようにした。

2020年の遠隔授業開始当初は、その日の授業の内容や授業にアクセスできなかった場合の対処方法について示した「学習指示書」をBEEFとポータル掲示板に掲載した。これは通信環境によるトラブルが発生した場合を想定し、作成したものである。その後、遠隔授業が円滑に実施可能な状況になったため、各コースの初回授業のオリエンテーションでの説明のみとしている。

特に、受講の際の留意事項として、録画・録音などの撮影は不許可であり、授業資料の他者への提供や転載はできないことを受講生に確認、徹底した。これらは特段に取り上げて説明するまでもないマナーのようにも思われるが、情報リテラシーやそれらに対する認識には個人差があることから、受講生が安心して受講できる環境を整え、授業活動を実施するため、開講当初にこれらの事項を共通認識としておくことが肝要である。

また、授業は受講生同士や教員との会話練習などコミュニケーション活動を重視したため、通信不良や何らかの個人的な事情など配慮すべき事由を除き、カメラはオンで参加するように促した。実際には、約3分の1の受講生が寮の通信状態が不安定なためカメラをオンにできなかったり、理由は不明であるがクォーターの中盤からはカメラオフで参加していた受講生もいたものの、半数以上はカメラオンで授業活動に参加していた。

意識的に受講生の名前を呼びかけながら挨拶したり、オンラインでも見て取りやすい動作を加えながらアイコンタクトをしたことや、笑ったり驚いたり何気ない受講生の反応を捉え意図的に会話や学習内容に関連させたことにより、受講生にとっては、単に出席の確認のためのカメラオンではなく、コミュニケーション活動や学習内容そのものに関わるということが理解できた結果、カメラオンでの参加につながったと考えられる。なお、大人数の講義形式の授業であれば、Zoomの「フォーカスモード」を活用することも便利であるが、日本語入門コースの受講者数は少人数であり、授業活動で交流することを重視したため使用しなかった。

情報リテラシーやプライバシーの取り扱いに関して、国や文化圏、或いは育った年代によりその捉え方は異なるため、遠隔授業を実施する際は、大学やセンターでの基本方針を定め、受講生と教員が共にそれら留意事項を確認することを必須の準備手順とする方法も一考に値すると考える。

各コースの受講者数は、年度とクォーターにより変動はあるが、最も少ないコースで1名、平均約10名程度であった。コロナ禍による入国制限の関係で自国での受講生が半数を占めるクォーターもあった。日本に入国できた者は、センターの教室や研究室、寮などから受講していた。

3. 遠隔授業において特に意識的に取り入れた活動内容

遠隔授業の場合、パソコンやタブレットに向かって座る時間が長く、教室での対面授業のように互いの息遣いやコミュニケーションの間合いを感じづらいため、集中力を維持しにくい傾向がある。授業のやり方次第で、授業を聴いてはいるものの、「テレビを観ている」感覚に陥り、主体的に授業活動へ参加する意欲が、対面授業に比べ大きく低減することが懸念される。また、受講生同士の交流機会も圧倒的に減少する。こうした難点に対処するため、授業では以下4つの活動を意図的に取り入れた。

その導入にあたっては、準備時間の制約がある中で実践的な対応が必要であったため、末尾に記載した実践的なセミナーやワークショップを参考とし⁽⁶⁾、それらに用いられた具体的手法のうち導入可能なものを取り入れた。遠隔授業における実践を通して、その有用性や効果を確認するという、試行錯誤の側面がある。

3-1. アイスブレイク

毎回、授業の冒頭で週末や一週間の出来事、季節毎の日本の行事や各々の文化などについて話す時間を設けた。このアイスブレイクは、受講生の日本語による思考回路への切り替えを促すこと、教員と受講生、そして受講生の相互交流の促進に効果的で、授業活動の主要な柱の一つであるグループワークの素地づくりを目的として取り入れた。

例えば、「今週はどうでしたか」、「週末、何をしましたか」など、毎回、同じ質問を繰り返すことにより、受講生が授業時間以外にも意識して日本語に目を向け、それを既習文型で表現する練習や考える習慣を養うことができる。さらに、受講生の学習意欲の向上と学習の継続を促すため、アイスブレイクで出た話題を次回の文

型導入に取り入れ、関連する話題を提供するなど、その場限りの話題で終わらせるのではなく、次回の学習項目に紐づけ、展開することを心掛けた。

第1クォーター・第3クォーターは、英語と日本語を併用してやり取りし、運用できる文型が増える第2クォーター・第4クォーターにかけては、可能な限り既習文型を使って日本語で話す時間とした。

受講生と教員の会話の糸口として、誰もが一度は経験する遠隔授業で起こりがちな突発的な事象や混乱、機器の不具合などをあえて話題として取り上げた。「ミュートのまま話し続けていた」、「通信状態が不安定で、ロボットのように音声や画面が途切れ途切れになった」などは、受講生にとっては緊張や不安を感じてしまいがちな場面であるが、一見マイナスの要素に思える出来事も一つの話題として授業の説明や内容に取り入れることで、受講生の通信不良やオンライン操作に対する不安を軽減するよう試みた。

また、アウトプットを促したい文型や語彙などを用い、スライドで文や写真を示しながら、教員自身のことについても話すようにした。こうしたやり取りは、受講生が3～5文程度の会話を続けられるようになるうえで、参考にすべき一例となりうるものである。

10名以下の少人数で十分に時間を確保することができたため、必ず一人ずつ話してもらい、その発話に対して各受講生が一人ずつ、何か日本語で質問してもらうようにした。基本的には既習文型と語彙を使うことにしていたが、受講生から質問があったものや、関心を示した話題については、適宜、語彙や表現を補足して紹介し、充実を図った。これらに加え、受講生同士の交流のきっかけを提供するために、互いに教え合うように促した。更にアイスブレイクが浸透してくると、その話題について受講生自ら質問し、話題を提供してくれるという発展が見られるようになった。

こうした経験上、アイスブレイクによる授業の雰囲気作りや受講生同士のコミュニケーションの促進に効果が表れるのには、1クォーターほどの学習時間の経過を要し、第1クォーター・第3クォーターの終わりごろから第2クォーター・第4クォーターのはじめにかけて十分に機能し始める。そして、受講生間で成立する関係性や授業の雰囲気は、そのクォーターの受講生の特性に依存し、様々に異なる。ただし、結果的な現象として発生するコミュニケーション方法や表現方法に多様性があるとしても、アイスブレイクが機能し始める大前提として、受講生が他者と交流を図ろうとする姿勢を醸成することが必須である。

この2年半の実情を踏まえると、第1回～第3回は受講生が授業の進め方や

LMSなど授業支援システムの操作に慣れるのに手一杯であり、また履修登録等の関係上、受講生も確定していないため、アイスブレイクを楽しむほどのゆとりは醸成されにくい。クォーター中盤の第4回～第6回は、受講生は徐々に固定メンバーになってくるものの、受講生同士まだ互いに様子を見ている状態で、受講生がより話しやすい英語による発話量も第2クォーター・第4クォーターの終わりと比較すると少ない。第7回～第8回、つまり第1クォーター・第3クォーターの終わりごろは互いに顔見知りになり、これまでの授業活動や練習を通して、互いの人柄やコミュニケーションを図る上での大まかな特性がわかっていることが影響して英語と日本語ともに発話量が増え始める。

3-2. ブレイクアウトルームにおける協働学習

受講生同士の発話を促すために、Zoomのメインルームとブレイクアウトルームを使い分け、クラス全体で話題を共有する時間と受講生同士で交流する時間を区分して設けた。受講生のグループ分けにおいては、各受講生の日本語の習熟レベルやコミュニケーション能力の特性を考慮し、単に相互交流に留まることなく、受講生同士の自発的な協働学習ができるだけ促進されるような組み合わせとなるように留意し、適宜グループを変更するなどの工夫をした。ブレイクアウトルームは、主に表2の入門Ⅰ④グループワークや入門Ⅲ⑤練習Cを行う際に使用した。ブレイクアウトルームのグループワークは、自発的な交流態度やコミュニケーションスキルを育成するために、基本的に受講生に委ねる方針をとった。各グループの様子を見ながら、会話をせずコミュニケーションや練習を放棄しているようであれば、教員から交流を促す助け舟や練習のヒントを出し、沈黙が流れているものの会話のラリーを継続させようとしていることが窺えれば敢えて介入しなかった。これは、上記のグループ分けの工夫を前提に、自発的相互学習を促すことを企図したものであり、教員は受講生の様子を観察しつつ、「相互に教え合うよう」促すことに力点を置いたものである。その際、「教える」、「教えられる」の役割が固定しないように、受講生それぞれが答えられる話題となるように誘導した。

具体的には、「学習した文型や語彙の産出練習」や「システムなどの機器操作」の状況が挙げられる。例えば、受講生Aが日本語による質問への回答や練習問題の解答に時間を要している場合、まず教員がヒントを提示し、単語など何か一言でも日本語で発話するよう誘導した。これは受講生が日本語による発話に慣れることを重視したため取り入れた手法である。そして、教員は「おしいですが、発音はきれ

いですね」など英語や受講生が知っている日本語の表現などを織り交ぜながら一言コメントしたうえで、別の受講生Bに受講生Aに対してさらにヒントを出すよう促したり、直接回答したりしてもらった。その際、受講生Bには練習内容に合わせて、文型のポイントや新出語句の意味を英語で簡単に説明するよう促した。またこの手法は、受講生AB間のみでのやり取りにとどまらず、受講生Bがヒントを出すことに困っていると、また別の受講生Cが助け舟を出して援助するといった姿勢を生み出す効果があった。上述の例においては、受講生Aは教えられる、受講生Bが教えるという関係性であったが、次には立場の逆転を意図して、受講生Aが教える立場になるようにした。例えば、LMSの操作方法やハウリングを起こした場合の対処法などを知っている場合は、他の受講生に教えるよう促した。機器の操作は、日本語の学習内容に直接的な関係はないが、それらを通して受講生同士のコミュニケーションが促進される効果が得られた。

特筆すべき事として、こうした取り組みが可能となった要因の一つにクラスの人員規模（最大10名程度の少人数であったこと）を挙げることができる。受講生の特性、習熟度を踏まえつつ3人～4人程度のグループ編成が可能になり、且つ授業時間内に全グループに一通り目を配ることができたからである。

もっとも、教員（ホスト）は、各ブレイクアウトルームの様子を確認することができるが、教室のようにクラス全体の様子を把握することは難しい。ブレイクアウトルームは、良くも悪くも受講生だけの空間になるため、そのクラスの雰囲気や受講生によっては円滑な学習促進のため教員の介入などの配慮が必要になる可能性にも留意が必要である。

3-3. 日本文化に関する動画や歌の鑑賞

授業の中盤、ショートブレイクとして、日本文化に関する動画や歌の鑑賞時間を設け、動画の鑑賞中はカメラをオフにしても良いことにした。動画は、受講生が授業で話題にしていたこと、既習の単語やフレーズが出てくるもの、メディアで話題になっていたり大学生の間で流行しているものを基準に選定し、凡そ3分～5分程度の長さのものを準備した。意外にも、「JPOPを聴かない」、或いは「最近の流行を知らない」という受講生が比較的多かった。動画は学習内容に関連するものを選定しているが、教科書の内容とは直接関係がないため、果たして受講生が関心を持つか否か懸念されるところもあったが、様々なジャンルの動画の鑑賞は、寧ろ好評であった。

また、ある受講生が「日本で知り合った人たちと話したいが、言語能力に自信がないので話しかけるきっかけを掴みづらい。」と述べていたこともあって、これら動画や歌の鑑賞は、受講生が他の学生や留学生をはじめ、日常知り合った様々な人たちと交流を深めるきっかけづくりに少しでも役立てたいとの狙いを併せ持っていた。

3-4. 生教材の活用

遠隔授業において「テレビを観ている」という感覚を避けるため、受講生自身が「能動的に動く」こと、主体的な授業参加を授業冒頭のアイスブレイクや文型練習などの際に取り入れた。具体的には、アイスブレイクで、自分で撮影した写真や動画などを画面共有しながら話してもらうことにより、他の受講生にとっては、内容の聞き取りや理解を促す補助的な効果が得られた。同時に、受講生同士が交流するきっかけにもなり、互いに自発的に質問し合うようにもなった。

この他、プライバシーに配慮したうえで、練習内容に関連する、教室内にあるものや身の回りのもの、お気に入りのものなどを他者に示しながら紹介してもらった。ある受講生が伝統衣装を紹介すると、また別の受講生が自身の伝統衣装を着て披露してくれる場面もあった。日本文化のみならず、受講生それぞれの文化を知ることにも興味が広がったようであった。

また、こちらが教室には運べないが自宅にあるものなどを画面を通して示すこともできた。対面授業では教室にあるものや持ち物に限りがある。画面共有の機能を活用し、受講生が自身で撮影した写真や動画などをクラス全体に共有できることは、遠隔授業の利点である。

4. ハイフレックス型授業

2022年第2クオーターの第6回目の授業は、教室とオンラインを繋いだハイフレックス型授業を実施した。GECの方針として、第2クオーターからは遠隔授業から対面授業に切り替えてもよいということであったが、オンライン受講を希望する受講生もいた。そのため、オンライン形式と対面形式を組み合わせたハイフレックス型の実施を試みることにした。教室での受講生は2～3名、オンラインでの受講生は3～4名であった。使用した教室にはハイフレックス型授業対応の機材がなかったため、カメラ付きのパソコンでZoomにアクセスし、教室ではそのパソコンをモニターに接続し、同時に教室の様子がオンライン参加者に見えるよう教員と受

講生側にそのパソコンカメラを向けて授業を進めた。オンライン受講生は、自身のカメラはオフで音声のみで参加した。

受講生には、初めてのハイフレックス型授業の試みであるため、協力が必要になるかもしれないことを予め説明していたこともあり、日ごろ以上に協力的な姿勢で授業に取り組んでいた。機材など不十分な環境のため却って教室とオンラインの受講生が互いに平素以上に話に耳を傾け、リアクションするという姿勢が見られ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする意識が高まったように見受けられた。

この様に教室とオンラインの受講生が双方向に交流を図りながら授業活動を進めることのできた要因は3つあると考える。第一に、受講生同士、教員と受講生がそれまでの授業活動やアイスブレイクなどを通して、互いの性格の特性などを知っており、ある程度の信頼関係を構築できていたこと。第二に、参加者が10名以下の少人数で直接的コミュニケーションが取りやすい規模であったこと。第三に、受講生に日本語の基礎的な言語能力が身につけていた時期であり、且つ教室とオンラインからの受講それぞれに日本語の言語運用能力が比較的高くリードできる受講生がバランス良く分かれて在席していたこと。換言すれば、こうした諸条件が整うタイミングが、ハイフレックス型授業を実施する適切な時機と言えよう。これは遠隔授業からハイフレックス型授業に切り替える場合に妥当する。

また、10名を超える人数規模になれば、音響やカメラなどハイフレックス型授業に対応した機材準備は必須であり、また、クォーターの開講当初の授業であれば、練習の進め方や教室とオンラインの交流の仕方に工夫が必要になることが予想される。仮に、コースの開講当初からハイフレックス型で実施する場合は、前述の機材準備や工夫に加え、受講生の日本語のレベルやコースの受講者数などについて検討する必要があると考える。ゼロ初級学習者を対象にハイフレックス型授業を実施する場合はどのような課題があり、どのように対処すべきか、また、どのようなコース内容（聴解・会話・読解・作文）や受講生の日本語運用能力（ゼロ初級・初級・中級・上級）がハイフレックス型授業によるより大きい学習効果が期待できるのかについては、今後の課題とし考察を深めたい。

5. 教員同士の情報交換などについて

大学に出講しない遠隔授業の期間中、学生の様子、ZoomやLMSの機能などオンラインツールの運用について、教員同士が情報交換する場をいかに設けるかということが課題の一つである。対面授業時であれば、受講生の様子や授業の進め方など

についての情報交換が比較的容易に行えていたが、遠隔授業の場合は受講生の個人情報のことなどを考慮すると情報交換がしづらい側面があった。そうした事情もあり、センターではLMS「BEEF」に教員が情報交換できるページが開設されていた。

また、センターでは授業に関する意見交換や授業実施運営スキルの向上を目的に、授業を教員や大学院生に公開する「ピア・レビュー」を実施している。これは先生方や大学院生とリアルタイムで交流でき、自身の授業方法について振り返る機会となった。同時に、受講生にとってもセンターの先生方や大学院生と交流することができ好い刺激になったようである。

6. 遠隔授業・ハイフレックス型授業実施時の課題

以下のとおり、①カメラの使用法、②適正な受講者数の範囲、③教員同士の情報交換の方法、④ハイフレックス型授業に伴う機材準備については引き続き対策を講じ、検証すべき課題であると考えられる。

まず、①カメラの使用および受講者数について、カメラは基本的にオンで参加し、受講者数によりフォーカスマードなどの機能を使い分ける必要がある。対面授業であれば、授業前後の休憩時間や授業中の取り組みから、受講生の特性や受講時の様子、受講生同士の関係性などについて情報を得ることができる。しかし、リアルタイム型遠隔授業では、受講生がリアクションボタンを活用してもカメラをオフにした状態であると、非言語コミュニケーションが音声のみに限定されてしまい、教員にとっては受講状況を確認する重要な手段が遮断されてしまう。受講生が全員カメラオフで参加する場合は、上述の方法とは別に準備や対策が必要になることが予想される。

また、ゼロ初級レベルの学習者を対象としたリアルタイム型遠隔授業を実施する場合、学習効果や課題に対するフィードバックおよび授業準備など授業運営の観点から、②の適正規模（受講者数）についても検証が必要である。双方向の交流や活動を重視した授業を設計する場合、その適正規模は5名～10名弱であると考えられる。この人数は、本稿「3. 遠隔授業において特に意識的に取り入れた活動内容」の実践から想定したものである。これら活動の基軸は、「(1) 受講生同士のグループ内での交流（ブレイクアウトルーム）」、「(2) グループと教員との交流（ブレイクアウトルーム、メインルーム）」、「(3) グループ同士の交流（メインルーム）」である。1回の授業時間内（90分）に、新出の学習項目の導入や(1)(2)(3)の活動、受講生1人あたりの発言時間（想定時間1人2～3分程度）、およびそれら活動・受

講生各々に対する教員からのフィードバック時間（想定時間1～2分程度）などを考慮し、一講義あたりの総時間からの逆算により上述の適正規模を算出した。

人数規模によりそれぞれのメリット、デメリットはある。ゼロ初級レベルの受講生にとって入門コースは、日本語による言語運用能力とコミュニケーション能力の基盤を形成する時期に相当する。この時期、受講生は文型や語彙をインプットし、さらにそれをアウトプットして、教員からのフィードバックや受講生同士の交流を通して誤用を認識し、また正しく産出する練習を繰り返す。誤用を恐れずに練習し、協働学習できる環境で学ぶことは、日本語という言語に慣れるのみならず、コース修了後の言語学習の取り組み方や学習の継続、ひいては日本語を通して受講生同士が世界の多様な文化を知り、その交流を自身の研究や留学生活に活かすことにつながる効果が期待できる。したがって、そのためには、入門コース（ゼロ初級レベル）においては、受講生が一聴衆や一視聴者としてではなく、講義の構成員であることを自覚しつつ、主体的に授業活動に参加できる規模で実施することが重要であるといえよう。仮に、15名以上になれば、受講生一人一人に対する交流やフィードバックに使用できる時間は減るため、双方向型の授業を実施することは難しく、講義形式の授業にならざるを得ない。他方、5名以下になれば、少人数であるが故、様々な受講生と交流しながら練習するという発展性に繋がらざらぬといったデメリットが生じてくる。

次に、③教員同士の情報交換の方法について、とりわけ受講生の受講状況について、個人情報保護に留意した上で、どのようなツールを用いて教員間で共有するかは問題である。対面授業実施時であれば講師室で一言二言でやり取りが済むような内容、すなわちメールで尋ねるほどでもないが情報共有し、念のため確認したい事柄について、どのようにして連絡を取るかについても検討、対策が必要である。

最後に、④ハイフレックス型授業を実施する場合は、教室全体の音声を拾いオンラインでの受講生に伝える音声機材や教室からの受講生個人の音声を伝達する機材が必須である。音声に関しては、専用機材なしでは対応に限界があり、ハウリングを起こしたり、教室の音声が届かなかつたり問題が生じることがある。

7. 評価方法について

受講生は、期末試験等の結果から見て、シラバスに記載の授業の到達目標「①ひらがな・カタカナ五十音の読み書きができるようになる（漢字学習は含まない）、②日本語の初歩的な構造を理解できるようになる、③入門レベルの文型・語彙、日

常会話の基本表現を用い、日常のことや自分自身のことについて簡単なコミュニケーションができるようになる」を7～8割程度達成している。この事実は、受講生の発話量がクォーターはじめから終わりにかけて、日本語と英語ともに増加したことや遠隔授業に出席し、学習を継続したことなどからも見て取ることができる。遠隔授業において導入した各手法が、それぞれどの程度学習目標の達成に寄与したかを個別に数値的に示すことは極めて困難ではある。しかし、少なくとも授業活動と受講生の授業目標の達成とは相関関係にあり、その結果から総合的な成績評価にも現れていると評価できる。

前述の様々な授業手法について、その有効性や課題等を評価する場合、自然科学的な定量分析の手法（即ち、同一若しくは類似の属性を有する複数の集団間で、それらの手法を用いた集団と用いない集団とを客観的評価基準に基づいて定量的比較検討する方法）を用いることは、事実上、困難である。そのため、ここでは受講生の学習目標達成の状況や授業における学習姿勢などに対する担当教員の評価および観察を通して、定性的に整理した。

ただし、評価について、授業活動と到達目標の達成がどの程度関係があるのか、到達目標を踏まえ、どのような観点から如何に評価を行うのか、より明確な数値や関連性を提示するためには、評価方法自体についての検討とそれによる評価結果の検証が改めて必要になる。本稿は、遠隔授業における双方向型の活動実践内容とその活用の可能性に主眼を置き、その効果測定のための評価方法については、別稿で論じたい。

おわりに

遠隔授業の準備ないし開始当初は、教員から受講生に対する一方的な授業内容の実施になりやすいことや受講生が「テレビを観る」ような受動的な学習になる懸念があった。そして、そのネガティブな影響として、コミュニケーション手段である言語（日本語）学習であるにもかかわらず、他者とのコミュニケーションが図られない、という事態も推測された。

そのための対応策として、双方向の交流を目的としたアイスブレイクや受講生同士の協働学習を促すブレイクアウトルームを活用したグループワークを導入することとした。

それら手法の詳細については前述のとおりであるが、その実践の際に共通して重視した観点は、学習者が能動的に参画し、コミュニケーションを通じた双方向型の

協働学習を促進することであった。受講生の視点から捉えると、各々が「教える側」、「教えられる側」の両方の立場になる。そして、教える側は自身の習得の過程を振り返ることで、その過程をメタ認知することができる。同時に、教えられる側はその思考過程を追従できる。そのことは、学習者間での相互作用を生み出すものである。教授者としては、そのことを促進すべく、話題の提供などを通じて誘導するよう努めた。遠隔授業のデメリットとして、双方向に交流する機会が失われ、受動的な受講になる可能性があるのではないかと危惧していた側面については、機材などの活用の仕方次第で遠隔授業のメリットに転化することもでき、学習の継続や受講生同士の交流を促進する機能を担いうるものと言えよう。

他方、ICTを使用することから得られる利点を活用できたことも注目に値する。ハイフレックス型授業によって、教室内外の者同士の交流や相互学習が可能になったことを含め、地理的な制約を超えた同時学習が実現できるようになった。

また、GECでは、受講生が自身の学修を振り返ること、および教員が授業運営を振り返り、改善することを目的として、クォーターごとに「授業振り返りアンケート」を実施しており、受講生から「入門コース」の遠隔授業に対するコメントや評価も得られている。しかし、これは実践報告（本稿）を前提としたアンケートではなかったため、今回は根拠資料として用いることができない。本稿で述べた手法の有効性や効果をさらに立証するためには、引き続き経年的なデータ収集が必要である。

注

- (1) 2022年4月、グローバル教育センター（GEC）（旧国際教育総合センター、2016年4月～2022年3月、旧留学生センター、1993年4月～2016年3月）が設立された。
- (2) 入門Ⅰは2022年第4クォーターのみ担当した。入門Ⅱは2021年4月から現在に至る。入門Ⅲは2020年4月から現在に至る。
- (3) GECは、1年間を4つの学期に分けたクォーター制度を導入している。原則、「第1クォーター・第2クォーター」、「第3クォーター・第4クォーター」それぞれに2つのクォーターを連続して受講する。ただし、受講生の約10%は、初めのクォーター（第1クォーター或いは第3クォーター）のみ受講し、連続して受講しない。なお、これにはクォーター途中で何らかの事由により受講の継続を中断した受講生は含んでいない。

- (4) その年度の曜日・スケジュールの関係上、入門Ⅲ（会話）、入門Ⅱ（文型）、入門Ⅰ（聴解・文字）の順で実施したクォーターもあったが、受講生からの意見を踏まえ、理解と定着を促すために、入門Ⅱ（文型）、入門Ⅲ（会話）、入門Ⅰ（聴解・文字）の順で実施している。
- (5) 神戸大学LMS「BEEF」は、eラーニングプラットフォーム「Moodle」を利用し、Webを活用した学習支援システムである。詳細は、神戸大学情報基盤センターのホームページ（<https://www.istc.kobe-u.ac.jp/glossary/lmsbeef/>）を参照のこと。（2023年2月12日閲覧）
- (6) 参考資料として、オンラインで開催されたセミナーやワークショップを本稿末尾に列挙しておく。これらセミナーやワークショップの内容は、本文中に引用していないが、遠隔授業の構成や活動を考える際に着想を得たものである。本来であれば、遠隔授業に関する論文や実践報告を精査し、授業運営に活用し、またその実践を振り返ることが本筋である。しかし、「はじめに」にも述べたように、とりわけ遠隔授業の開始当初は、遠隔授業の準備やフィードバック、ICTの活用方法の習得など、より実践的な課題への対応が喫緊の課題であった。そのため、代替策としてオンラインでセミナーやワークショップでの取り組み事例を参考に、授業に取り入れながらそれら手法を見直していく方法を執ることにした。

遠隔授業を運営するにあたり、オンライン開催のセミナーやワークショップに参加する利点として、三点挙げることができる。第一に、ICTをいかに活用し、どのようなツールがあり、その特性は何かなど操作の実演が見られること。第二に、セミナーやワークショップを一つの授業と捉え、リアルタイム型にしる、オンデマンド型にしる、遠隔授業を受ける受講生の視点から自身の授業運営を捉えなおすことができること。第三に、他の教員が遠隔授業を実施する際に直面している課題や受講生の反応などを論文よりも早くリアルタイムで知ることができると。

参考としたセミナー・ワークショップ

岩居弘樹（2022）「ウィズコロナ時代のICTを活用した大学授業の新たな挑戦—学生の能動的学修を目指して—」「2022年度 大阪府内地域連携プラットフォーム FD研修」（2022年9月28日）

清原文代（2021）「Moodleを使用した非同期型オンライン中国語授業」「セミナー：ICTを活用した中国語授業」（2021年8月1日）

- 小林めぐみ (2021) 「『On Board for More World Adventures』の紹介」『映像教材の活用方法』金星堂 (2021年7月31日)
- 洪潔清 (2021) 「『Chinese Adventure』の活用事例」「セミナー：映像教材の活用方法」金星堂 (2021年7月31日)
- 氷野善寛 (2021) 「ホワイトボードアプリ “Google JamBoard” とGoogleスライドの中国語授業への応用」「セミナー：ICTを活用した中国語教育のための電子資料及び教案の開発」(2021年11月13日)
- 紅粉芳恵 (2021) 「SlackをLMSとして使ってみた」「セミナー：ICTを活用した中国語授業」(2021年8月1日)
- 吉田壘 (2022) 「Googleドライブを活用して授業作りを効率化しよう」「アクティブラーニング技法ワークショップ」(2022年6月10日)
- 吉田壘 (2022) 「学習者のモチベーションを高めよう」ワークショップ (2022年6月17日)
- 渡邊ゆきこ (2021) 「VRを使った中国語授業の試み」「セミナー：ICTを活用した中国語授業」(2021年8月1日)

Practical Examples of “Introductory Japanese Courses” by Remote Learning

SHINOMIYA Aiko

All Japanese classes in Kobe University Global Education Center were given by remote learning from 2020 April to 2022 July. This paper reports the practical class activities of Introductory Japanese courses. This course was performed by following methods and contents: ice breaking; group work; mutual assistance; videos related to Japanese cultures and music; authentic materials; live class; HyFlex class. This courses also especially focused on communication and mutual understanding of each cultures and background. Through the courses not only build up fundamental Japanese language skills but also develop communication skills based on participants personality and cultural background.